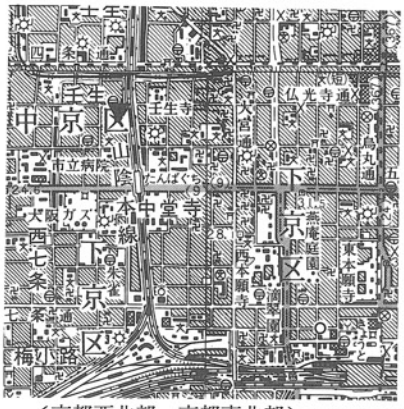
京都・平安京跡右京五条一坊六町

1　所在地　京都市中京区壬生松原町
2　調査期間　一九九九年（平11）五月
3　発掘機関　㈶京都市埋蔵文化財研究所
4　調査担当者　吉本健吾・竜子正彦
5　遺跡の種類　都城跡
6　遺跡の年代　平安時代～近世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査はマンション建設工事に伴う立会調査である。当地は右京五条一坊六町の東側中央部に位置している。文献では五条一坊には、平安時代後期から末期の貴族の邸宅と小泉荘の存在が知られるのみである。



調査では敷地中央部から西側全域で池状遺構を検出した。中央部南側で確認した東肩は北東方向へ続き、底部は肩口近くで少し段がつくが、そこから西へは緩やかに傾斜し、最深部は地表下一七二㎝であった。埋土は二から三層に分かれるが、いずれの層からも平安時代前期の遺物が出土した。

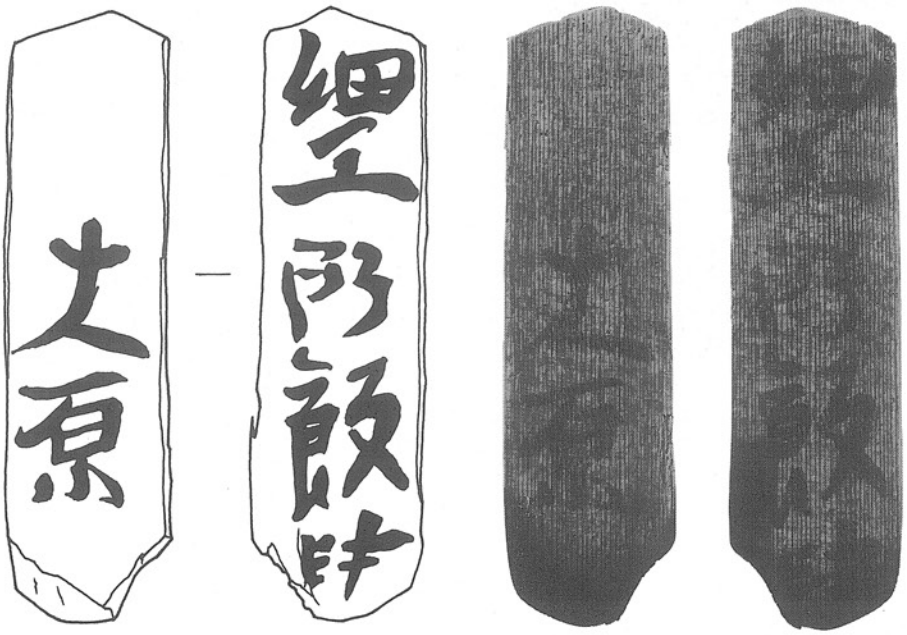
一九八六年に立会調査した北側隣接地でも、同時期の遺物を含む北東から南西方向の西肩をもつ池沼状堆積を確認しており（京都市文化観光局『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和六十一年』一九八七年）、今回検出した部分とあわせて、同一池状遺構の東肩と西肩にあたると考えられる。一九八六年の調査では、池の底部には直径約五㎝の石が敷きつめられていたことを確認しており、今回の調査で、池状遺構が調査地中央部から幅約六ｍの流路状の形状で北東方向へ続くことが確認できた。

この遺構からの出土遺物には、土師器皿・杯・蓋・高杯・甕、須恵器杯・蓋・甕・壺、平・丸瓦、木簡がある。木簡は、調査地西端の池状遺構の最下層である暗オリーブ灰色泥土層から出土した。報告分以外にも数点あるが、細片のため判読できない。

8　木簡の釈文・内容

(1)　・「細工所飯肆×　　(81)×22×2　019
　　・「　　大原

木簡の形状は、上端が圭頭状に整形され、下部は「肆」の半ばか



ら下が焼損している。柾目材。

表は長岡京から出土した「考所飯肆升」（『長岡京木簡一』一〇号木簡）などと同形式の請飯文書と考えられる。「細工所」とは、内匠寮か貴族の家政機関に関係する施設が想定される。

裏は、「大原」の書き出しが上端から約三㎝、二文字分下から始まるが、その下は焼損により黒変し、文字が続くかどうかも不明。

なお、木簡の釈読にあたっては、京都産業大学の井上満郎氏、京都大学の西山良平氏、吉野秋二氏からご教示を得た。

9　関係文献

京都市文化市民局『京都市内遺跡立会調査概報　平成十一年』（二〇〇〇年）

（竜子正彦）